

これで生きる

24

海外駐在員

現場は、ネパール西部のネパールガンジから、でこぼこの「高速道路」を西へ1時間半ほど走ったチサパニにある。山国とはいえ、そこはインド国境に近いタライ平原。取材した5月で気温は42度に達した。集落の横を流れるヒマラヤ有数の大河、カルナリに取水口を設けて5キロ余の水路を開き、白く乾いた原野を農地に変える。ネパール最大級という灌漑工事だ。

暑熱で日中はコンクリートが固まらない。黙々と動くサントナル履きの数百人の作業員。そんな現場に、石黒久(67)はカトマンズの事務所から2〜3カ月1度出向き、進行状況を確かめて打ち合わせを重ねる。肩書は富山県の建設会社、丸新志鷹建設のネパール支店顧問。山の民シエルパ中心の支店で、建設工事の近代化を託されている。

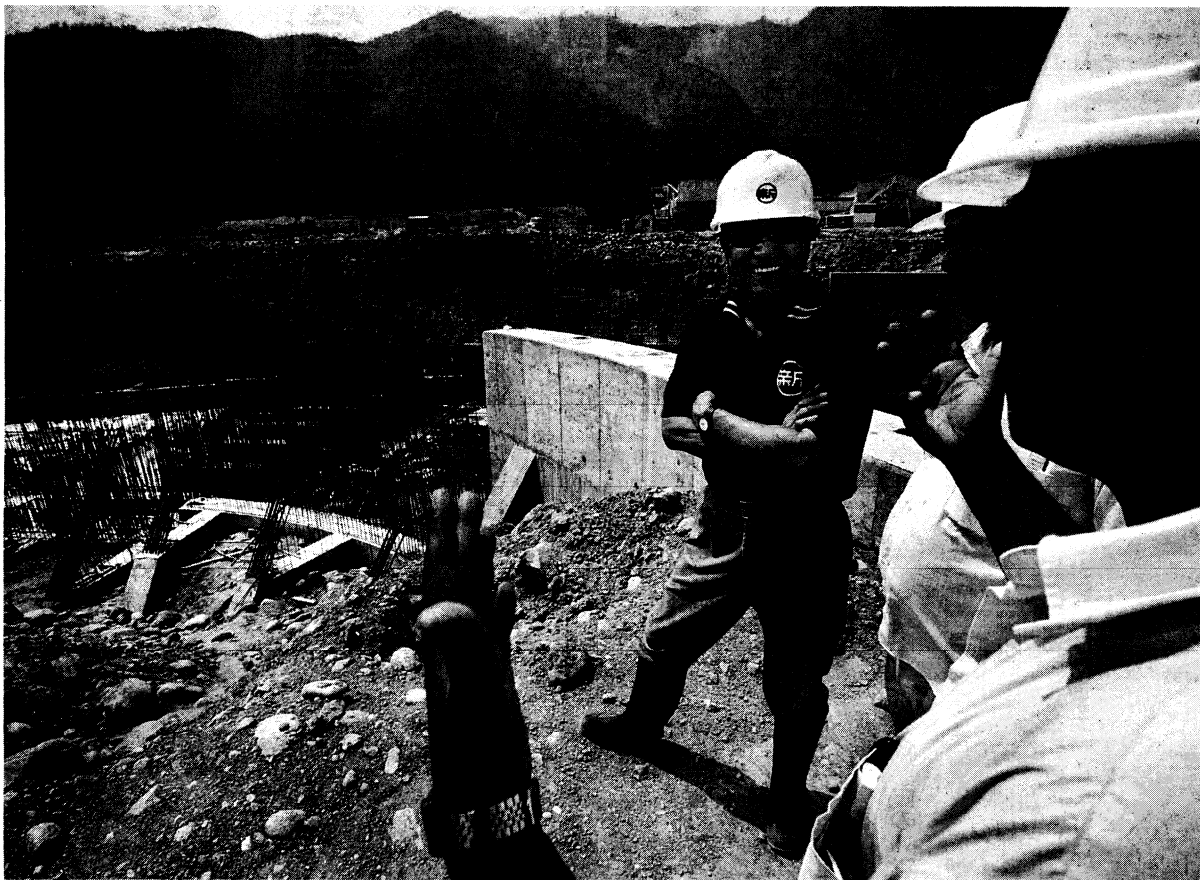
▽生と死の狭間
69年、初めての海外遠征は、インドからトラックに資材を乗せてネパールへ入った。大地に沈む夕日とヒマラヤの高峰。これが世界へ目を広げる原風景になった。

▽日系企業の半数が観光業
外務省の「海外在留邦人数調査」によると、2011年10月1日時点の海外の日本人は118万2557人で、過去最高となった。国別では多い順に米国、中国、オーストラリアとなっている。

▽経験糧に自信
会社は立山のガイドを輩出した立山町芦峯寺にあり、92年に海外唯一の支店を開設した。2011年にカルナリ川工事を受注。取水口建設の第一期だけで10億円を越し、フータンの道路工事も契約。国際的な土木工事の経験者が必要となり、石黒に白羽の矢が立った。

「ワーク・ファースト、ドキュメント・レーター(作業委員、小沢剛、写真はフリーカメラマン、高橋邦典)

シエルパと近代化担う



カルナリ川の灌漑施設工事現場で、作業スタッフと話す石黒久＝ネパール西部チサパニ

を担いで助けに登ってきたのが、シエルパと長谷川恒男だった。

一緒に登頂した加藤保男も長谷川も先鋭的登山家だが、その後、遭難した。2人をはじめ山の仲間がネパールや隣国のカラコルムの山に眠る。「加藤も星を見ながら登ってたんだろうな」。冬の世界最高峰に消えたパートナーをボツリとしたのだ。自らが情熱の矛先を仕事に向けていた間に消えていった仲間が眠る地、という点も気持ちが傾く要因だろう。

「ネパールは自分の青春を燃焼させてくれた国。シエルパにはエベレストで助けられた気負いなく感慨や意気込みを吐き出せる。技術屋として最後の応援ができる。技術屋として最後の応援ができる。技術屋として最後の応援ができる。」



カルナリ川の灌漑施設工事現場近くで水浴びをする子供たち。ネパール西部チサパニ。エバの考え方だ。経験と勘に頼った手法に、「工程表」と金銭面の「フロー」に基づくシステムチックな管理を導入。現場当たりの資金と資材投入から、毎月の入金予定と機械、材料、労賃、作業所経費など細目化した出金のバランスを取って仕事を進める仕組みを指導する。「仕事すれば何となくもうかると、一生懸命働いただけは駄目」と指摘した。けれど、焦らない。実現しない現実をストレスをため込む邦人を見つけた。「幼稚園児に諭すように教えている。辛抱強く指導が定着するまで3〜4年かかる」

▽経験糧に自信

支店長のハクバ・ギャルは「石黒さんの仕事のやり方が、わが国には必要だ。彼が来た意味がそこにある」と語った。食事、水、衛生。環境は厳しい。年齢もある。丈夫でなければ務まらない。「これまでに現場経験から自信はある。年とともにしんどくなるが、それ覚悟で来ているから。静かな口調だった。

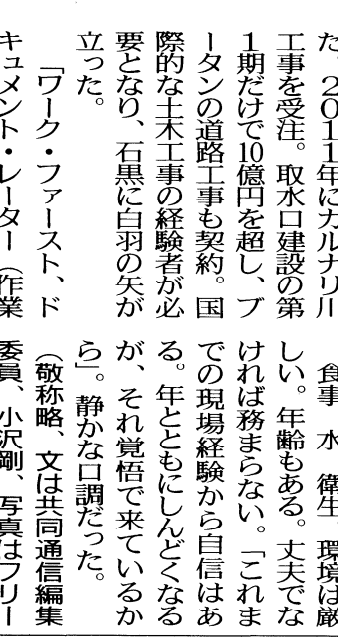
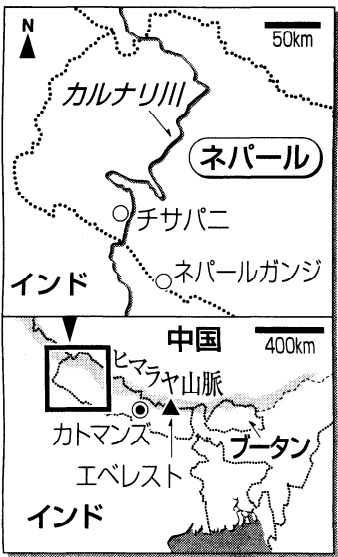
「ワーク・ファースト、ドキュメント・レーター(作業委員、小沢剛、写真はフリーカメラマン、高橋邦典)

「ネパールへ恩返しを」

▽現場主義貫く

神戸に家族を残し、66歳の昨年夏、単身赴任した。給与は、日本では高額とは言えない。しかし石黒はこう言う。「お金なら他に誘いもあった。わがふるさと」という思いがあるから、何か支援したい。胸に宿すのは、自らを形作った国の一助になれば、との思いだ。

トップクラスの登山家だった。新潟高校で本格的に登山



がん も

病気が も

先進医療 も

保障 も

がんの入院 2倍
1日につき **10,000円**
日帰り入院から保障